



Title	神戸発、国際協力NGO「PHD協会」の歩みと未来への挑戦
Author(s)	坂西, 卓郎
Citation	目で見えるWHO. 2023, 85, p. 18-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92791
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

神戸発、国際協力NGO「PHD協会」の歩みと未来への挑戦



公益財団法人PHD協会事務局長

坂西 卓郎

公益財団法人PHD協会事務局長。1979年神戸生まれ。2010年に入職し、国際研修事業を担当。2020年には困窮外国人のためのシェアハウスを開設。

PHD 協会の設立経緯

地球の上に住む人は、皆、平和で健康に暮らしたいと思っています。しかし、現実にはそうではない状況にある人々がいます。それぞれ各自の努力だけでは、その厳しい状況の克服が難しい場合に、国を越えての協力が必要となります。それは政府が行うもの、国連のような国際機関が行うもの、民間が行うもの、個人で行うものと様々です。

PHD 協会は、1962 年から 18 年間にわたりネパールで医療協力を行われた岩村昇医師の経験をもとに提唱されました。1981 年に設立され、兵庫県神戸市で草の根の活動を続けて 43 年目になります。岩村医師は外部の専門家による病気の治療への協力と並行して、村人にもできる日常的な取り組みから、健康な生活を作っていくことへの支援の必要性を提唱しました。基本的な知識を普及させ、衛生環境を整え、十分な量と質の栄養を摂ることができれば、そうは医者や病院に頼らなくてもすむ、村の人々の能力と村にある資材を活用することのきっかけを作るために日本の人々と交流をすること、この発想が PHD 協会の国際研修事業になりました。

アジア・南太平洋の村の青年たちを日本に招き、村の課題、問題を自らの取り組みで改善していくきっかけとなる経験を日本各地の皆さんがお手伝いをする。加えて研修生が学ぶだけでなく、日本の受け入れ側の人達も研修生から学ぶという双方向の分かち合い、学び合いを大切

にして約 40 年。今までに 334 人の研修生を受け入れてきました。

「帰ってから本番」、地域のために活動する研修生たち

私達が村の青年たちを直接応援するのは、日本国内での一年間の研修です。しかし、研修はあくまで準備期間、本番は帰国してからになります。村に帰り、日本での経験から得たことをまずは自らが実践し、周囲に見てもらうところから始まります。村の人々の興味、関心を引き出し、一緒に取り組む仲間を増やしていくことが次の段階です。派手な活動ではなく、成果に結びつくには時間がかかりますが、いったん根づけば、日本からの金銭・物質的な支援はなくとも、彼ら彼女ら自身の力で、村づくりが進んでいきます。住民主体かつ持続的な地域づくりがアジア各地で芽吹いています。

インドネシアでの健康コンテスト!

その活動の一つを紹介させていただきます。インドネシアの西スマトラ州で元研修生と日本から医師も参加して実施したのが「健康コンテスト」です。

インドネシアでは肥満による高血圧や糖尿病が課題となっていました。監修者である喜多野章夫医師は次のように指摘されています。「内臓脂肪が生活習慣病を引き起こし、さらに脳梗塞や心筋梗塞などの重篤な疾患につながります。また体重の

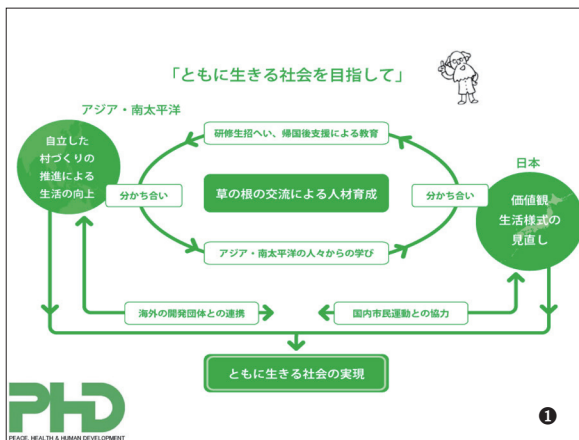
増加は膝や腰の負担になり確実に活動力を奪い、また体重の増加につながるという悪循環を生み出します」。

実際に対象地域では BMI30 や 40 近い方もおられ、脳梗塞や心筋梗塞でお亡くなりになる方や障がいなどの後遺症が残る方もおられます。残念ながら高度な医療を受けられる地域ではありません。そこで、健康を維持するための食生活や日々の運動などを考えよう、という取り組みを研修生達と考え、始めたのが健康コンテストです。

コンセプトは「正論は人を動かさない。だから楽しく健康について考え、行動変化へ向かおう!」でした。主に検査項目は 3 つでした。1. 基礎検査、2. 血液検査 (HbA1c、CHOL、TG、HDL、LDL、Non-LDL)、3. 体力測定。総勢 100 名以上が参加してくれ、コンセプト通り「楽しく」健康について学び、啓発することができました。現地でも大きな反響がありましたが、コロナ禍の中で一旦中断となっています。

インドネシアから助産師を迎える

2023 年はインドネシアから地域で妊産婦の健康を守る助産師の方、ミャンマーからはスラムで児童労働の子ども達のケアをしているフィールドワーカーの方を迎えます。二人とも市民の健康を最前線で守る人たちです。特に助産師のアギーは待望の地域初の助産師さんとして期待の大きい方です。「世界に平和と健康を担う人



① PHD協会の活動イメージ
③ 帰国後、地域で活躍する研修生達

② インドネシアでの「健康コンテスト！」
④ 食料支援の様子

材を育成する」ために、歩みを続けていきます。

コロナ禍で始めた国内での居住支援活動

現在の PHD 協会は上記の研修事業と国内での困窮外国人への居住支援活動の二本立てで活動しています。コロナ禍まっただ中の 2020 年 10 月に国際協力・交流シェアハウス「みんなのいえ」を設立しました。

設立の起点は 2018 年に神戸にミャンマーからの第三国定住難民の 5 家族が来られた際のことでした。たった 5 家族でしたが、住居を見つけるのに大変苦労しま

した。住所が決まらなければ学校も保育園も仕事も決められず生活をスタートすることができません。だったら「自分達でその場所を作れないか」と考えたのが始まりでした。

結果的に岩村医師が提唱された「共に生きる」という当会のミッションをシェアハウスという形に具現化することができました。居住支援で大切にしているのは「平等ではなく公平」です。NGO の特徴でもあると思いますが、画一的な支援（平等）ではなく、困窮者の状況に合わせた支援（公平）を心がけています。時には偏りがある支援になっているかも知れませんが、限られた資源を必要な方々に届けていま

す。支援内容は居住に加え、食料、就労、日本語習得、行政手続きの支援なども行っています。

現在は国軍のクーデターにより帰国困難となったミャンマーの方々、タリバンによる政権奪取によるアフガニスタンからの避難者、そしてウクライナからの避難民の受け入れ、技能実習生の失踪者、他にも困窮外国人の方々の支援を行っています。

今後も岩村医師が提唱された PHD 運動を国際研修事業と居住支援事業の二本柱で推進していきます。「草の根」がキーワードです。皆様のご参加とご支援をよろしくお願いします。